

ボーンスプレッダーを利用し歯槽提の拡大を行った症例の臨床的検討

首藤, 俊介

<https://hdl.handle.net/2324/1441165>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（臨床歯学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



論文審査の結果の要

ボーンスプレッターを利用し歯槽堤の拡大を行った症例の臨床的検討

歯槽堤の骨幅が狭小なためにインプラント埋入が困難なことがあるが、そのような場合の骨造成法の一つにボーンスプレッターによる歯槽堤拡大法がある。本研究では、この方法によるフィクスチャー周囲の状況を経時的に検討し、予後を調査することにより、この方法の有用性に関して検討を行った。

対象患者は、2004年4月から2010年2月までにインプラント治療を希望した患者のうち、インプラント埋入に支障となる既往歴がなく、インプラント埋入部位の歯槽骨の骨幅が狭く、ボーンスプレッターによる歯槽堤拡大法が適応と判断した35例(59本)とした。内訳は男性14例、女性21例、平均年齢は60.6歳であり、上顎適応例が14例、下顎適応例が21例、適応部位の平均骨幅は4.11mmであった。手術には、ボーンスプレッター型歯槽堤拡大器具(Bone Spreading and Condensing System、Meisinger社、Neuss、Germany)を用い、使用したフィクスチャーはPOI(JMM社、Kyoto、Japan)を19症例(34本)及びAQB(ADVANCE社、Tokyo、Japan)を16例(25本)で、いずれもインプラント体部はストレート形状とした。

術中に小さな骨片の破折が5例でみられたものの、フィクスチャーの埋入は全例で完遂でき、術中ならびに術後の有害事象は認めなかった。ペリオテスト値は12ヶ月までは全例で時間経過とともに減少したが、その後は安定する傾向にあった。骨吸収の程度に関しては、最終補綴後6か月までは骨吸収が進行したが、1年以上経つと安定する傾向にあった。インプラント周囲組織の状態を示すprobing depth値は、最終補綴後1年以内は深くなったが、12ヶ月以降はほぼ安定する傾向にあった。プロービング時の出血は徐々に減少する傾向を示した。インプラント体周囲の発赤の有無に関しては一定の傾向はみられなかった。最終的なインプラント生着率は96.6%であり、下顎臼歯部で最終補綴後4年目に1例で、6年目に1例で脱落を認めた。

以上のように、ボーンスプレッターによる歯槽堤拡大法は通常埋入と比較しても特に遜色のない結果が得られた。本研究により、ボーンスプレッターによる歯槽堤拡大法の有用性が示され、学位論文として十分に値するものと判断された。

博士学位論文審査結果の要旨及びその担当者

(ふりがな) 氏 名	すどう しゅんすけ 首藤 俊介			
論文調査委員	主 査	九州大学	中村 誠司	教 授
	副 査	九州大学	古谷野 潔	教 授
	副 査	九州大学	久木田 敏夫	教 授